

特性自尊心と視点取得が他者からの曖昧な受容・拒絶 の解釈に及ぼす影響

平川 真・坂田佳奈子・森永康子

Effects of self-esteem and perspective taking on interpretive bias

Makoto Hirakawa, Kanako Sakata, and Yasuko Morinaga

低自尊心者は他者の言動を否定的に解釈し、その関係から自ら離れる傾向があることが示されている。本研究では、この解釈についてのバイアスが他者の視点を取得することによって消失するかどうかを、2つの研究によって検討した。親密な友人が自分に対して肯定的な態度を持っているとも、否定的な態度を持っているとも解釈可能なシナリオを用い、その場面での受容・拒絶認知や関係継続意思などを測定した。その結果、本研究が前提とした、低自尊心者が持つ否定的な解釈バイアスの存在自体が確認されず、他者の視点を取ることがバイアスに及ぼす影響を検討することができなかった。本研究の結果は、低自尊心者は他者の言動を否定的に解釈しやすいという現象の頑健性に対して疑問を投げかけるかもしれない。ただし、先行研究と本研究とでは、用いた刺激において他者との関係性が異なっていた。このことから、低自尊心者にみられる否定的な解釈バイアスが生起するかどうかを規定する可能性のある要因として、他者との関係性について議論した。

キーワード：解釈バイアス，特性自尊心，視点取得，親密な友人関係

問 題

社会的動物としての人間という考え方に代表されるように、我々は他者との関わりの中で生き、他者と離れては生きていけない。他者との良好な関係を築き、それを維持するという課題において、他者が自分に対して肯定的な評価を持っているのか、あるいは否定的な評価を持っているのかを知ることが重要である (Pinker, 1997)。なぜなら、自分に対して否定的な評価をもっている他者との関係では、投資した資源に見合う利益を得られる可能性が、自分に対して肯定的な評価をもっている他者との関係よりも低く、他者との関係に投資できる資源は有限である以上、自分に対して肯定的な評価をもつ他者と関係を築くことが望ましいためである。また、ある程度継続的な関係においては、その関係が解消されないように、他者が否定的な評価を持っていないかを監視し、その予兆があれば関係の改善を図るような行動をとる必要がある。この点について、Leary & Baumeister (2000)

が提唱したソシオメーター理論では、自尊心が他者との関係の良好さについての主観的なモニターとして機能していると想定されている。

日常生活において、自分に対する評価を他者から明確な形で与えられることは少ない。特に否定的評価について、「私はあなたのことが嫌いだ」ということをはっきりと言うことも、言われることもめったにないだろう。多くの場合、他者が持つ自分に対する評価は、自分やまた別の他者との関わりの中におけるその他者の言動を解釈することによって得られると考えられる。たとえば、「風邪を引いて困っている」ことを他者に伝え、その他者から何らかの援助があった場合、その他者は自分に対して肯定的な評価を持っていると解釈するかもしれないし、逆にその他者から何の援助もなかった場合、その他者は否定的な評価を持っていると解釈するかもしれない。また、このような解釈は主観的なものであり、同じ言動を観察してもそれを肯定的な評価のあらわれと解釈する人もいれば、否定的な評価のあらわれと解釈する人もいるだろう。

他者が自分に対して受容的であるか拒絶的であるかの判断に影響する要因の1つに特性自尊心が指摘されている。特性自尊心は、ソシオメーター理論に即せば、慢性的な被受容感として捉えられる。遠藤・阪東(2006)は、顔見知り程度の友人に授業を休んでいた分のプリントやノートのコピーをとらせてもらうというやりとりにおいて、高自尊心者と低自尊心者とは、相手の返答を受けた際に生じる否定的な自己関連感情の程度が異なることを示した。プリントやノートのコピーを要請した後に「うん、後でね」という返答を受けた場合、高自尊心者よりも低自尊心者の方が否定的な自己関連感情を感じていた。一方で「今もってないから、ごめんね」という返答を受けた場合においては、高自尊心者と低自尊心者で差は認められなかった。さらに遠藤・阪東(2006)では、その相手に対して別の機会に再度要請を行うかどうかを尋ね、相手への再接近可能性についても検討を行っている。否定的な自己関連感情の結果と同様に「うん、後でね」という返答を受けた場合には、高自尊心者よりも低自尊心者の方が、再接近可能性を低く評定することが示された。「うん、後でね」という返答は「今もってないから、ごめんね」という要請への拒否を意味する返答とは異なり、字義的には遅延はあるものの要請が承諾されることを意味している。したがって、前者の返答よりも後者の返答において否定的な感情を感じ、その相手への再接近可能性を低く評価した高自尊心者は、これらの返答の字義的な意味に対応した反応をとることができるといえる。しかしながら低自尊心者は、この両者の返答に対して同じように否定的な反応を示した。このことは、低自尊心者が字義的には受容を示す返答であっても、それをネガティブに解釈するようなバイアスが働いていることを示している。

他者の言動を否定的に解釈し、その他者との関係を回避するような傾向は、現実には良好な対人関係の構築や維持が可能であるにもかかわらず、自らその関係を絶つという望ましくない結果を生じさせる。低自尊心者がこのようなバイアスを持つ場合、同じ状況を高自尊心者よりも拒絶的に捉えるため、ますます特性自尊心は低下するだろう。つまり、特性自尊心の低さは解釈バイアスを生じさせ、その解釈の結果によってさらに自尊心が低下するというネガティブな循環過程がここには存在している。自尊心が低いために引き起こされるこの悪循環を打破する必要があるのではないだろうか。そのひとつの手段として視点を転換することが考えられる。

Holtgraves (2005) は話し手の視点に立つか聞き手の視点に立つかによって、発話の解釈が異なることを示した。この研究では刺激として、たとえば「私のプレゼンについてどう思った?」という質問に対する「良いプレゼンをするのは難しいよね」という返答を用いている。「良いプレゼンをするのは難しいよね」という返答は「私のプレゼンについてどう思った?」という質問に対して直接的な答えを与えておらず、Grice (1975) の関連性の公準を違反している。したがって、一般的にこのような返答はその話し手がプレゼンに対して否定的な態度を持っていることを含意し、そのような解釈が成立しやすい (Holtgraves, 1998, 1999)。Holtgraves (2005) の一連の実験は、話し手の視点に比べて聞き手の視点に立った場合に、このような発話を否定的な意味を間接的に伝えようとしていると解釈しやすいことを示している。また、聞き手立場で解釈させる際に、話し手が何を伝えようと意図しているのかについて考えさせると、否定的な解釈の成立率が減少することが示されている。

さらに、対人不安の高い人が否定的な解釈バイアスを持つことについて、守谷・佐々木・丹野 (2007) は、対人不安の高低によって状況の解釈が異なるのはその状況に自分が置かれた場合であり、友人がそのような状況に置かれた場合の解釈については対人不安の高低によって差がないことを示した。このことは、対人不安の高い人は状況を常に否定的な方向で解釈するのではなく、自己に注目が向いたときにそのバイアスが働くことを示している。

以上の知見から、低自尊心者が他者の言動を否定的に解釈する傾向についても、視点の転換が影響する可能性が考えられる。すなわち、低自尊心者は他者の言動を否定的に解釈しやすいとしても、そのバイアスは常に生じるのではなく、他者の視点を取ることができればバイアスは消失するかもしれない。そこで本研究では、特性自尊心と視点取得が状況の解釈に及ぼす影響を検討する。また、遠藤・阪東 (2006) では、シナリオの設定が顔見知り程度の友人であったため、本研究では低自尊心者の解釈バイアスが親密な友人関係でも生じるのかについて検討する。その理由は、親密な友人との関係の中でも、友人の言動を否定的に解釈し、その関係から自ら離脱するという傾向が低自尊心者にみられる場合、その傾向が本人の精神的健康にとって悪影響となる程度は顔見知り程度の友人関係の場合よりも大きいと考えられるためである。

研究 1

目的

低自尊心者が他者の言動を否定的に解釈するバイアスが、他の視点を取得した際に消失するかどうかを検討する。なお、対人的な相互作用場面においては、そのやり取りを行っている当事者、すなわち話し手と聞き手の視点と、そのやり取りを観察している第三者の視点が存在する。Holtgraves (2005) は他者の視点として話し手を、守屋他 (2007) は友人がその状況を体験している場面を想像させているという意味で、他者の視点として第三者の視点を設定している。そこで、本研究ではこれらの両方を他者の視点として設定し、自尊心が状況の解釈に及ぼす影響について検討する。なお、他者の視点を取得した際に否定的な解釈バイアスが消失するという仮定からは、聞き手の立場に置かれた場合には自尊心の効果が生じ、低自尊心者が否定的に状況を解釈するが、話し手や第三者の立場に置かれた場合には自尊心の効果は生じないと予測される。

方法

実験計画 聞き手立場、話し手立場、第三者立場の3条件を設定した。なお、参加者は1つの条件のみに参加した。

実験参加者 大学生126名(男性88名、女性38名;平均年齢18.9歳, $SD = 1.4$)を対象にシナリオを用いた実験を行った。なお、条件ごとの人数は聞き手立場条件が49名、話し手立場条件が47名、第三者立場条件が30名であった。

シナリオ シナリオは4種類作成した。シナリオ1は、「日曜日遊びに行こうよ」という発話に対し、「何もなかったらいいよ」という返答がある場面であった。シナリオ2は、「髪の毛切るか伸ばすか迷ってるんだけど...」という発話に対し、「どっちでもいいと思うよ」という返答がある場面であった。シナリオ3は、「お腹すかない?」という発話に対し、「うーん。すいてない」という返答がある場面であった。シナリオ4は、3人が会話している状況で、1人が「そういや今度の日曜のこと詳しく決めてなかったね」という発話をし、1人が「私、誘われていない」と考える場面であった。各シナリオは漫画形式で呈示した。シナリオの中での登場人物の関係は仲の良い友人関係として設定し、参加者の視点を示すため登場人物に「あなた」と表記した。また、本研究では友人との関係継続意思等を測定するため、登場人物に「Aさん」と表記し、その対象を示した。シナリオの詳細については付録を参照のこと。

聞き手立場条件と話し手立場条件の操作は、「あなた」と表記する登場人物を変えることで行い、第三者立場条件の操作は、教示文に「AさんとBさんが話しているところに通りがかった」という一文を加えることで行った。なお、シナリオには複数の発話が記載されているが、漫画内の最後の発話をした人物を話し手として記述する。すなわち、シナリオ1では「何もなかったらいいよ」と、シナリオ2では「どっちでもいいと思うよ」と、シナリオ3では「うーん。すいてない」と、シナリオ4では「そういや今度の日曜のこと詳しく決めてなかったね」と発話した人物が話し手である。また、シナリオ1から3は登場人物が2人であるため、最後の発話をしていない人物が聞き手であり、登場人物が3人いるシナリオ4では「私、誘われていない」と考えた人物が聞き手である。

これらのシナリオは、話し手が聞き手に対して肯定的な態度を持っているか否定的な態度を持っているかが曖昧な場面として設定されている。たとえば、シナリオ1の「日曜日遊びに行こうよ」という発話に対する「何もなかったらいいよ」という返答は、誘いに対する肯定的な要素を含んでいるが、「何もなかったら」という限定があるため、その返答から聞き手の誘いを最優先しないという話し手の態度を読み取ることが可能である。

測定変数 すべての条件で共通して特性自尊心を測定した。特性自尊心は、山本・松井・山成(1982)の尺度を用い、5段階で測定した(1. あてはまらない—5. 非常にあてはまる)。なお、自尊心尺度の α 係数は.81であった。他の測定変数は条件によって異なるため個別に記述する。

聞き手立場では、ネガティブ感情、ポジティブ感情、自分に対する話し手の肯定的態度についての認知、受容-拒絶の認知、関係継続意思を測定した。ネガティブ感情とポジティブ感情は、「この場面であなたは以下のようなことをどの程度感じると感じますか」と尋ね、ネガティブ感情3項目(つらい、傷ついた、不快な)、ポジティブ感情3項目(満足している、嬉しい、快い)を用い、5段

階で測定した (1. 感じない—5. 非常に感じる)。ネガティブ感情の α 係数はシナリオ 1 で.85, シナリオ 2 で.75, シナリオ 3 で.89, シナリオ 4 で.82 であり, ポジティブ感情の α 係数はシナリオ 1 で.90, シナリオ 2 で.76, シナリオ 3 で.67, シナリオ 4 で.98 であった。自分に対する話し手の肯定的態度についての認知は, 「あなたは A さんからどの程度好かれていると思いますか」という項目を用い, 5 段階で測定した (1. 好かれていない—5. 非常に好かれている)。受容-拒絶の認知は, 「あなたは A さんから受容されたと思いますか, 拒絶されたと思いますか」という項目を用い 5 段階で測定した (-2. 拒絶されたと思う—0. どちらでもない—2. 受容されたと思う)。関係継続意思は, 「あなたは A さんと今後どの程度付き合っていきたいと思いますか」という項目を用い, 5 段階で測定した (1. そう思わない—5. 非常にそう思う)。

話し手立場では, 聞き手のネガティブ感情とポジティブ感情についての予測, 聞き手に対する自分の肯定的態度についての認知, 受容-拒絶の意図を測定した。聞き手のネガティブ感情とポジティブ感情についての予測は, 「この場面で A さんは以下のようなことをどの程度感じると思いますか」と尋ね, 聞き手立場と同じ項目を用い, 5 段階で測定した (1. 感じない—5. 非常に感じる)。ネガティブ感情の α 係数はシナリオ 1 で.93, シナリオ 2 で.73, シナリオ 3 で.81, シナリオ 4 で.88 であり, ポジティブ感情の α 係数はシナリオ 1 で.95, シナリオ 2 で.94, シナリオ 3 で.90, シナリオ 4 で.88 であった。聞き手に対する話し手の肯定的態度についての認知は, 「あなたは A さんのことをどの程度好ましく思っていると思いますか」という項目を用い, 5 段階で測定した (1. 好ましく思っていない—5. 非常に好ましく思っている)。受容-拒絶の意図は, 「あなたは A さんを受容したと思いますか, 拒絶したと思いますか」という項目を用い 5 段階で測定した (-2. 拒絶したと思う—0. どちらでもない—2. 受容したと思う)。

第三者立場では, 聞き手のネガティブ感情とポジティブ感情についての予測, 聞き手に対する話し手の肯定的態度についての認知, 受容-拒絶の意図を測定した。聞き手のネガティブ感情とポジティブ感情についての予測は, 話し手立場条件と同じ測定を行った。ネガティブ感情の α 係数はシナリオ 1 で.92, シナリオ 2 で.88, シナリオ 3 で.92, シナリオ 4 で.81 であり, ポジティブ感情の α 係数はシナリオ 1 で.87, シナリオ 2 で.91, シナリオ 3 で.84, シナリオ 4 で.95 であった。聞き手に対する話し手の肯定的態度についての認知は, 「A さんは B さんからどの程度好かれていると思いますか」という項目を用い, 5 段階で測定した (1. 好かれていない—5. 非常に好かれている)。受容-拒絶の意図は, 「B さんは A さんを受容したと思いますか, 拒絶したと思いますか」という項目を用い 5 段階で測定した (-2. 拒絶したと思う—0. どちらでもない—2. 受容したと思う)。

結果と考察

まず自尊心得点の平均値 ($M = 2.8, SD = 0.7$) を用い, 参加者を高自尊心群と低自尊心群にわけた。その結果, 聞き手立場条件では高自尊心群が 25 名, 低自尊心群が 24 名となり, 話し手立場条件では高自尊心群が 23 名, 低自尊心群が 24 名, 第三者立場条件では高自尊心群が 22 名, 低自尊心群が 8 名となった。以下では条件ごとに, 各変数が高自尊心群と低自尊心群で異なるかを検討する。

聞き手立場条件における各変数の平均値を Table 1 に示した。遠藤・阪東 (2006) が示したような, 低自尊心者が他者の言動を否定的に解釈する傾向があれば, 低自尊心者は高自尊心者よりもネガテ

イブな感情が高く、ポジティブ感情が低く、自分に対する話し手の肯定的態度についての認知が低く、状況を拒絶的なものと認知し、関係継続意思が低まると予測される。しかしながら、各シナリオのそれぞれの変数について Welch 検定を行った結果、特性自尊心の高低による値の差は確認されなかった。また、特性自尊心を連続変量として扱い、各変数との相関関係を検討したが、Welch 検定の結果と概念的に同じく、有意な相関関係は認められなかった。

話し手立場条件と第三者立場条件における各変数の平均値を、それぞれ Table 2, Table 3 に示した。他視点を取得することによって、他者の言動を否定的に解釈するようなバイアスが消失するのであれば、各変数に特性自尊心の高低による差は確認されないと予測される。ただし、先の分析で示されたように、聞き手立場条件において特性自尊心の高低による差が確認されていないため、話し手立場条件と第三者立場条件で差が確認されなかったとしても、その結果をもって他者の視点を取得することによって、他者の言動を否定的に解釈するようなバイアスが消失するという主張をすることはできない。

聞き手立場条件の分析と同じく Welch 検定と相関分析を行った結果、一部自尊心の高低による差が確認されたが、基本的には両者に差は確認されなかった。差が確認されたのは、話し手立場条件における、シナリオ 2 のネガティブ感情予測と、シナリオ 1 の聞き手に対する話し手の肯定的態度についての認知であった (それぞれ、 $t(43.9) = 2.6, p = .01, r = .36$; $t(44.8) = 2.3, p = .01, r = .32$)。高自

Table 1
聞き手立場条件における群ごとの各変数の平均値(SD)

シナリオ番号 自尊心	1		2		3		4	
	低	高	低	高	低	高	低	高
ポジティブ感情	1.9 (1.1)	1.9 (0.9)	1.3 (0.6)	1.3 (0.6)	1.3 (0.6)	1.4 (0.6)	1.1 (0.2)	1.2 (0.4)
ネガティブ感情	1.7 (0.8)	1.4 (0.7)	1.6 (0.7)	1.7 (0.7)	1.2 (0.4)	1.4 (0.6)	3.3 (1.1)	3.0 (1.0)
肯定的態度認知	2.6 (1.1)	2.7 (0.6)	2.3 (1.0)	2.3 (0.7)	2.7 (0.9)	2.7 (1.0)	1.6 (1.0)	1.7 (0.7)
受容-拒絶認知	0.3 (1.1)	0.4 (0.9)	0.1 (0.9)	-0.2 (0.9)	0.3 (0.9)	0.2 (0.9)	-0.9 (0.7)	-0.8 (0.9)
関係継続意思	2.7 (1.3)	2.9 (0.9)	2.4 (1.1)	2.5 (0.8)	2.9 (0.8)	2.8 (0.9)	1.9 (1.1)	1.8 (0.8)

Table 2
話し手立場条件における群ごとの各変数の平均値(SD)

シナリオ番号 自尊心	1		2		3		4	
	低	高	低	高	低	高	低	高
ポジティブ感情	1.9 (0.9)	1.7 (0.7)	1.2 (0.3)	1.3 (0.5)	1.1 (0.3)	1.2 (0.4)	1.0 (0.0)	1.1 (0.5)
ネガティブ感情	1.6 (0.7)	1.4 (0.6)	2.1 (0.8)	1.6 (0.6)	1.6 (0.7)	1.6 (0.7)	3.5 (0.8)	3.3 (0.8)
肯定的態度認知	3.1 (0.9)	2.5 (0.8)	2.6 (1.0)	2.5 (0.9)	2.8 (1.1)	2.7 (0.8)	1.8 (0.9)	2.0 (1.0)
受容-拒絶認知	0.8 (0.9)	0.8 (0.8)	0.0 (0.8)	0.3 (0.8)	0.5 (1.0)	0.4 (1.0)	-0.7 (0.9)	-0.2 (1.0)

Table 3
第三者立場条件における群ごとの各変数の平均値(SD)

シナリオ番号 自尊心	1		2		3		4	
	低	高	低	高	低	高	低	高
ポジティブ感情	2.2 (0.8)	2.2 (0.9)	1.4 (0.6)	1.4 (0.7)	1.7 (0.7)	1.4 (0.7)	1.1 (0.2)	1.3 (0.7)
ネガティブ感情	2.0 (1.3)	1.8 (0.9)	1.8 (0.9)	2.1 (0.9)	1.5 (0.8)	1.5 (0.9)	3.5 (1.3)	3.1 (0.8)
肯定的態度認知	2.5 (0.8)	2.5 (0.9)	2.4 (0.5)	2.2 (0.9)	3.0 (0.8)	2.6 (0.9)	1.9 (0.8)	1.9 (0.7)
受容-拒絶認知	0.4 (0.9)	0.4 (1.0)	0.5 (0.8)	0.0 (0.8)	0.4 (0.9)	0.2 (0.8)	-0.4 (0.5)	-0.7 (0.8)

自尊心と比べ低自尊心者は、「髪の毛切るか伸ばすか迷ってるんだけど…」という相手の発話に対する、「どっちでもいいと思うよ」という自身の返答によって、相手にネガティブな感情を喚起させると予測していた。また、低自尊心者は、「日曜日遊びに行こうよ」という相手の発話に対して、「何もなかったらいいよ」と返答する状況から、自身が相手のことを好ましく思っていると判断することが示された。なお、相関分析の結果、Welch 検定で差が確認された部分にのみ関連が認められた。しかし、話し手立場と第三者立場における 32 回の検定のうち、上述の 2 箇所だけに差が確認されたという結果からは、特性自尊心と状況の解釈とに何らかの関連があると考えるのは妥当ではないだろう。

本研究の目的は、低自尊心者が他者の言動を否定的に解釈するという傾向があることを前提に、その傾向が他者の視点を取得した際に消失するかどうかを検討することであった。しかしながら、研究 1 で用いた刺激においては、そもそも低自尊心者が他者の言動を否定的に解釈するという傾向を確認することができなかった。研究 1 は、他者視点を取得した際に自尊心による解釈の違いが確認されないという結果を得ているが、低自尊心者が他者の言動を否定的に解釈するという前提が満たされていないため、他者の視点を取得することが解釈のバイアスに及ぼす影響については検討できていない。そこで研究 2 では、遠藤・阪東 (2006) が用いた刺激を使って、他者の視点を取得した際に否定的な解釈バイアスが消失するかどうかを再度検討する。

研究 2

目的

遠藤・阪東 (2006) の刺激を用い、低自尊心者が他者の言動を否定的に解釈するバイアスが、他者の視点を取得した際に消失するかどうかを再度検討する。

方法

実験計画 自尊心 2 (高/低) × 他視点取得の操作 2 (あり/なし) の 2 要因参加者間計画であった。

実験参加者 大学生 69 名 (男性 35 名, 女性 34 名; 平均年齢 21.3 歳, $SD = 1.4$) を対象にシナリオを用いた実験を行った。なお、他視点取得の操作がある条件には 34 名, 操作がない条件には 35 名が参加した。

シナリオ 遠藤・阪東 (2006) の刺激を用いた。ただし研究 1 と同様に、親密な友人関係の中での解釈バイアスについての検討を行うため、顔見知り程度の友人という設定を仲の良い友人に変更した。シナリオの内容は、仲の良い同性の友人 A さんに対して、授業を休んでいた分のプリントやノートをコピーさせて欲しいと要請し、A さんが「うん、後でね」と返答するものであった。

手続き シナリオを呈示した後、条件操作を行った。他視点取得操作あり条件では、「同じ状況で同じセリフをあなたが言う立場だった場合を想像してください。その時、あなたはどのような理由で『うん、後でね』と返すと思いますか。理由を思いつく限り書いてください」と教示し、自由記述をさせた後、変数の測定を行った。他視点取得操作なし群ではシナリオの呈示後、何も挿入せずに変数の測定を行った。測定変数は研究 1 の聞き手立場条件と同じであった。なお、特性自尊心の α 係数は.78, ネガティブ感情は.76, ポジティブ感情は.79 であった。

結果と考察

まず自尊心得点の平均値 ($M = 3.0, SD = 0.63$) を用い、参加者を高自尊心群と低自尊心群にわけた。その結果、視点取得操作あり条件には高自尊心群が 22 名、低自尊心群が 12 名となり、視点取得操作なし条件には高自尊心群が 13 名、低自尊心群が 22 名となった。Table 4 に各変数の平均値を条件別に示した。仮説が正しいければ、操作がない条件では自尊心の効果が生じ、操作がある条件では自尊心の効果が生じないと予測される。すなわち、他視点取得操作と特性自尊心の交互作用効果が有意になると期待される。それぞれの変数について 2 要因分散分析を行った結果、関係継続意思についてのみ自尊心の主効果が有意だった ($F(1, 65) = 12.0, p = .001, \eta^2_p = .16$)。その他の変数については、各要因の主効果や交互作用効果は確認されず、本研究の仮説は支持されなかった。

総合考察

他者が自分に対して持っている価値を把握することは重要である。しかし遠藤・阪東 (2006) は、低自尊心者が他者の言動を否定的に解釈し、その関係から離れる傾向を持つことを示しており、低自尊心者は自分の価値を実際よりも低く見積もってしまうことが明らかとなっている。本研究では、この解釈についてのバイアスが、他者の視点を取得することによって消失するかどうかを検討した。

研究 1 では、親密な友人が自分に対して肯定的な態度を持っているとも、否定的な態度を持っているとも解釈できるようなシナリオを用い、どの登場人物の視点でシナリオを読むかを操作し、解釈バイアスに及ぼす視点の影響を検討した。他者の視点を取得することによってバイアスが消失するのであれば、聞き手の視点でシナリオを読む場合には、自尊心の高低によって、状況の解釈や他者が持つ肯定的態度の認知、関係継続意思に差が見られ、話し手あるいは第三者の視点でシナリオを読む場合には、そのような差が確認されないと考えられる。しかしながら、聞き手の視点において自尊心の高低による差が確認されず、本研究が前提とした低自尊心者が持つ否定的な解釈バイアスの存在自体が確認されなかった。

そこで研究 2 では、遠藤・阪東 (2006) の刺激を用い、話し手がなぜそのような発言をしたのかについて考えさせることで他視点取得の操作を行い、他視点取得の影響を検討した。その結果、特性自尊心の高低と他視点取得の有無との交互作用効果は確認されず、仮説は支持されなかった。関係継続意思においてのみ特性自尊心の主効果が認められ、低自尊心者が関係継続意思を低めていた。ただしこの効果は、低自尊心者が高自尊心者に比べ、全般的に関係継続意思が低い状態にあること

Table 4
条件ごとの各変数の平均値 (SD)

他視点取得操作 自尊心	あり		なし	
	高	低	高	低
ポジティブ感情	1.9 (0.7)	2.0 (0.5)	2.3 (1.0)	2.3 (1.0)
ネガティブ感情	1.4 (0.5)	1.7 (0.7)	1.8 (0.9)	1.4 (0.6)
肯定的態度認知	2.9 (0.8)	2.6 (0.7)	2.7 (1.0)	2.5 (0.7)
受容-拒絶認知	0.8 (1.0)	0.3 (1.1)	0.7 (1.0)	0.3 (1.0)
関係継続意思	3.5 (0.8)	2.9 (0.8)	3.7 (1.2)	2.7 (0.8)

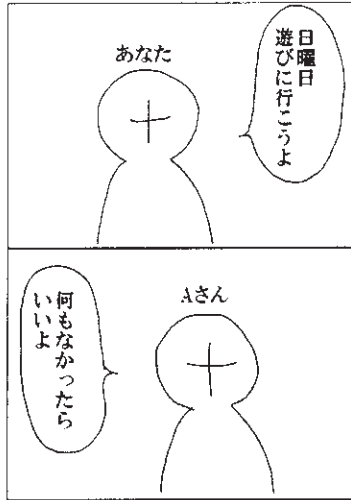
によって生じた可能性が考えられる。低自尊心者が状況を否定的に解釈するというバイアスがあるならば、研究2で測定したポジティブ感情・ネガティブ感情、肯定的態度の認知、受容-拒絶の認知といった変数にも同様の差が確認されるはずである。したがって、関係継続意思における差を、否定的な解釈バイアスの結果として解釈することは妥当ではないと考えられる。

以上のように本研究では、低自尊心者が他者の言動を否定的に解釈するという傾向自体が確認されず、他者の視点を取ることがバイアスに及ぼす影響を検討することができなかった。この結果は、遠藤・阪東 (2006) が示した、低自尊心者が否定的な解釈バイアスを持つという現象がどの程度頑健なのかという疑問を生じさせるかもしれない。ただし、遠藤・阪東 (2006) は顔見知り程度の関係での検討を行い、本研究では親密な友人関係での検討を行っている。このことは、低自尊心者が持つ否定的な解釈バイアスが生起するかどうかを規定する要因として、他者との関係性の要因がある可能性を示している。親密な友人関係では関係が進展しており、その他者の言動を解釈する際には、その他者の性格やこれまでの自分とのやり取りについての知識など、様々な情報を用いることができるが、顔見知り程度の関係では、他者の言動を解釈するための情報が相対的に少ないと考えられる。したがって、その解釈において自尊心などの解釈者の特性的な要因が影響する程度が相対的に高くなる可能性が考えられる。このような関係性を操作した検討を行うことで、低自尊心者が持つ否定的な解釈バイアスについて、その限定条件を明らかにすることができるかもしれない。

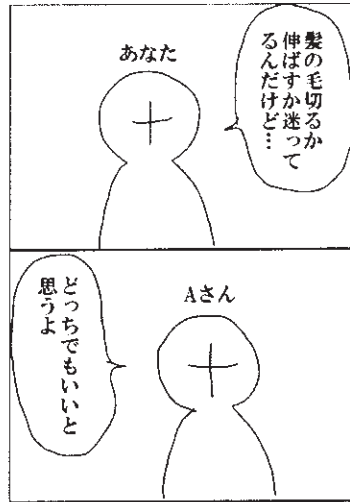
引用文献

- 遠藤 由美・阪東 哲也 (2006). 他者からのフィードバックの解釈に影響を及ぼす自尊感情の効果
関西大学社会学部紀要, **38**, 39-55.
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics*. Vol. 3. *Speech acts*. New York: Academic Press. pp. 41-58.
- Holtgraves, T. (1998). Interpreting indirect replies. *Cognitive Psychology*, **37**, 1-27.
- Holtgraves, T. (1999). Comprehending indirect replies: When and how are their conveyed meanings activated. *Journal of Memory and Language*, **41**, 519-540.
- Holtgraves, T. (2005). Diverging interpretations associated with the perspectives of speaker and recipient in conversations. *Journal of Memory and Language*, **53**, 551-566.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 32. San Diego, CA: Academic Press. pp. 1-62.
- 守谷 順・佐々木 淳・丹野 義彦 (2007). 対人状況における対人不安の否定的な判断・解釈バイアスと自己注目との関連 パーソナリティ研究, **15**, 171-182.
- Pinker, S. (1997). *How the mind works*. New York: W. W. Norton & Company.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

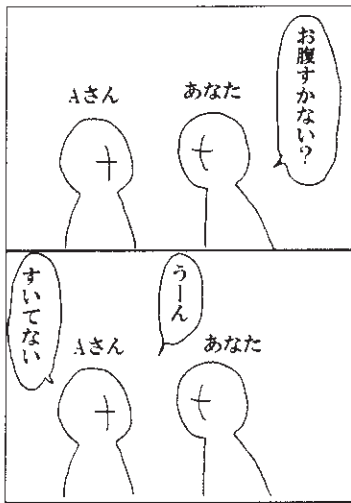
シナリオ1



シナリオ2



シナリオ3



シナリオ4

